

恋愛経験は結婚の前提条件か

—2015年家族形成とキャリア形成についての 全国調査による量的分析—

小林 盾 大崎 裕子

[要約]

この論文では、「結婚まえの恋愛経験が、結婚のための前提条件であるのか」というリサーチ・クエスチョンを検討した。これまで、恋愛経験が量的に測定されることが、ほとんどなかった。

そこで、「2015年家族形成とキャリア形成についての全国調査」を実施し、全国の20～69歳の個人1万2007人から、初婚までの恋人人数、デート人数、キス人数、性関係人数をデータ収集した。

結婚経験の有無を従属変数とし、ロジスティック回帰分析をおこなった。その結果、(1) 恋愛人数が1人以上いることの効果を調べたら、男女とも恋人やキスが1人以上いると、結婚のチャンスがあがった。(2) 恋愛人数の量の効果を調べたら、男性はデート人数とキス人数が、女性は恋人人数とキス人数がふえるほど、結婚のチャンスがあがった。

したがって、結婚まえの恋愛経験のうちとくに恋人とキスが、結婚のための前提条件とはいえないまでも、促進要因となっていることがわかった。

[キーワード]

恋愛、結婚、恋愛結婚、家族形成

1 イントロダクション

1.1 パズル

出生動向基本調査によれば、日本社会の結婚は、戦後まで見合い結婚が中心だった。これが1960年代に恋愛結婚に逆転され、2010年では9割近くの結婚が恋愛結婚となっている(図1左上)。このように、日本社会では恋愛結婚化が進んだ。

同じ期間に、国勢調査によれば生涯未婚率が男女ともに上昇しつづけた。その結果、2010年には男性で約2割、女性で1割が結婚せず、未婚化が進行している（図1右上）。いっぽう、人口動態統計によれば、合計特殊出生率（女性1人の平均出産数）が低下しつづけて、2010年に1.4となり、少子化が進んだ（図1下）。

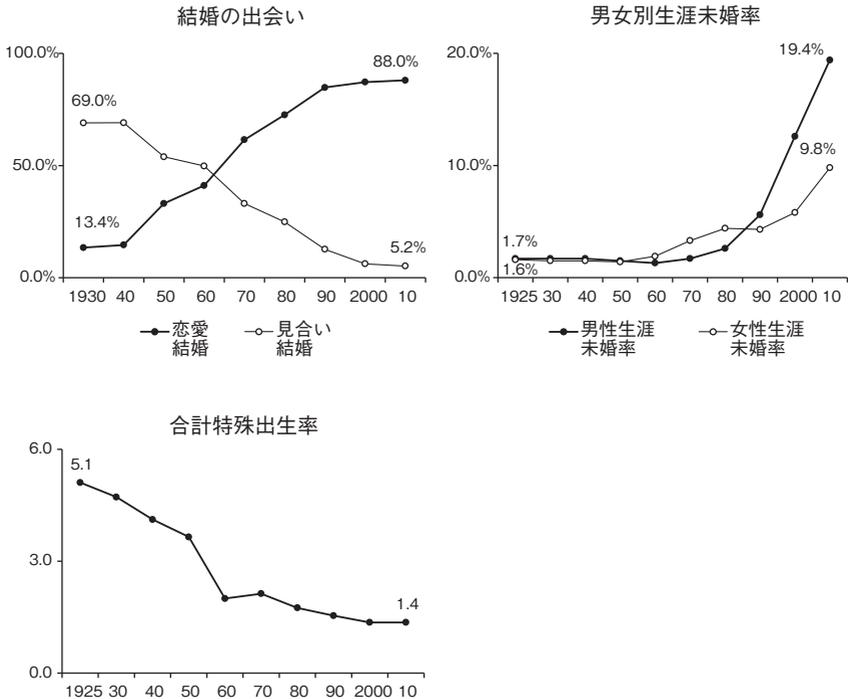


図1 家族形成の推移

- (注) 1) 出典：出会いは出生動向基本調査、生涯未婚率は国勢調査、合計特殊出生率は人口動態統計。
- 2) 出会いの恋愛結婚は「職場や仕事で」「友人・兄弟姉妹を通じて」「学校で」「街なかや旅先で」「サークル・クラブ・習いごとで」「アルバイトで」「幼なじみ・隣人」の合計。

人口動態統計によれば、日本における婚外子の比率は2008年で2.1%と低い。そのため、家族形成のためのメイン・ルートは、まず恋愛し、つぎに結婚し、そのつぎに出産することとなっているようである (図2)。

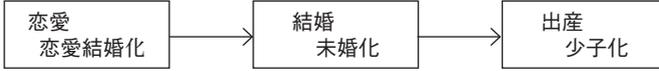


図2 日本社会における家族形成のメイン・ルートと各要素の趨勢

そうだとすれば、(佐藤他編 2010 が結婚の壁とよんだように) 我われの面前にいわば「恋愛の壁」があり、まずこれ乗り越えて恋愛をスタートする必要がある。さらに、そのあと「結婚の壁」と「出産の壁」を乗り越えて移行できた人だけが、出産することができるといえる。この背景には、「恋愛と結婚と性関係が結びついていなければならない」という「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」(ノッター 2007) が、規範意識として存在しているようである。

では、恋愛は結婚とどのような関係にあるのだろうか。恋愛から結婚への移行を、人びとはどのように行っているのだろうか。なにが条件となっているのだろうか。

1.2 先行研究

恋愛の実態について、山口 (2013) と森川 (2007) が恋愛のプロセスを、松井(1993)は恋愛における心理メカニズムを、NHK「日本人の性」プロジェクト編 (2002) と日本性教育協会編 (2013) は性行動を、開内 (2015) は告白の規範を、北村・阿部 (2007) は合コン文化を、谷口 (2013) と牛窪 (2015) は近年の動向を扱う。しかし、いずれにおいても恋愛経験が結婚というイベントにどのように関わるかが、解明されていない。

恋愛と結婚の関係については、山田・白河 (2008) が、恋愛結婚が主流となったのに、人びとの意識が対応できていないため、婚活 (結婚活動) が必要であると指摘した。谷本 (2008) は、恋愛が結婚の前提ではなくなりつつあることを、雑誌の内容分析をおこなってあきらかにした。ただし、どちらも人びとの実態についてのエビデンスを、用いていない。

いっぽう、小林 (2014) は、結婚まえの恋人人数と結婚の関係を計量

的に調べた。低学歴であれば初婚までの恋人人数が増えるほど結婚のチャンスが上昇し、高学歴ではピークのある曲線的な関係となることをあらかじめにした（ピークは2.7人）。しかし、恋人人数以外の恋愛経験の役割については、分析されていない。もしかしたら、デートをした経験やキスをした経験が、結婚の前提条件となっているかもしれない（表1は先行研究の整理）。

表1 先行研究の整理

先行研究	内容	未説明
山口（2013）他	恋愛の実態	恋愛と結婚の関係
山田・白河（2008）他	恋愛と結婚の関係	実態
小林（2014）	恋人人数と結婚の関係	恋人人数以外の効果

1.3 リサーチ・クエスチョン

そこで、この論文では恋人人数以外の恋愛経験も含めて、以下のリサーチ・クエスチョンにアタックすることで、恋愛の役割に総合的にアプローチする。もしこの問題が未解決のままだと、ややもすれば家族形成のメカニズムを見誤って、本当に支援が必要な人が置きざりにされてしまうかもしれない。

リサーチ・クエスチョン：恋愛結婚化が進むなか、結婚まえの恋愛経験は、結婚のための前提条件となっているのか。

1.4 仮説

それでは、この問いをどのような仮説へとパラフレーズできるだろうか。ここでは、Becker（1964）や小林他（2015）とおなじように合理的選択理論を用い、「人びとは恋愛経験によって、対人魅力やコミュニケーション能力を人的資本として蓄積し、それを有効活用することで結婚として回収する」と仮定する（図3）。

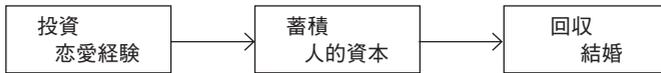


図3 人的資本論にもとづく仮定

そのうえで、以下の仮説を検証する。ここでは、恋愛経験は測定のしやすさから、告白した人数やキスをした人数など恋愛に関わる「人数」とし、総称して「恋愛人数」とよぶ。したがって、独立変数は恋愛人数、従属変数は結婚経験があるかどうかとなる（図4）。

仮説1（恋愛人数1人以上の効果）：恋愛がスタートするためには、恋愛の壁を超える必要がある。そのため、初婚までの恋愛人数が0人から1人以上となるほど、結婚のチャンスが増えるだろう。

仮説2（恋愛人数の量の効果）：恋愛結婚が実現するためには、恋愛から結婚へスムーズに移行し結婚の壁を超える必要がある。そのため、初婚までの恋愛人数が多い人ほど、結婚のチャンスが増えるだろう。



図4 仮説

2 方法

2.1 データ

「2015年家族形成とキャリア形成についての全国調査」を実施した。量的調査である。恋愛について詳細にデータ収集する必要があり、プライバシーに関わる質問が多かったため、インターネット上でウェブ調査をおこなった（マクロミル社に委託）。調査期間は2015年3月6日（金）23：34～3月10日（火）9：42だった。

母集団は全国20～69歳の個人モニタ91万967人（調査業・広告代理業をのぞく）とした。サンプリングは、男女、10歳ごと5つの年齢階級、6つの地域（北海道東北、関東、中部、近畿、中四国、九州沖縄）によっ

て60セルに分割し、2010年国勢調査に基づいて人口比例で標本サイズをセルごとに割りあてた。

計画標本は11万131人で、有効回収数は1万2007人、有効回収率は11.0%だった。セルごとに回収し、割りあてに達したら打ち切りとした。不足したセルについては追加依頼をした。なお、途中離脱したのは3,913人だった（計画標本の3.6%）。

最大で63問あり、回答時間の中央値は23.6分である。他にモニタ登録情報として年齢などの属性があり、分析可能な変数は1,706ある。すべての変数について、欠損値はなかった。

標本は、男性50.0%、平均年齢45.5歳、現在結婚（事実婚・婚約中を含む）62.3%／離別5.5%／死別1.8%／未婚30.4%、世帯収入の中央値400～600万円だった。

2.2 独立変数：恋愛人数についての質問

未婚者と既婚者で条件をそろえるため、未婚者の場合これまでの恋愛人数を、結婚経験者の場合は「初婚まで」の人数を質問した。質問文を「あなたには以下の人が、中学を卒業してからこれまで、何人くらいいましたか。現在の恋人を含みます。できるだけ一人一人を思い出して回答して下さい」とし、12項目についてバッテリーで質問した。この論文では以下の4項目を検討する（日本性教育協会編 2013 は性行動の指標としてデート、キス、性関係の3つの経験率を用いるので、参考とした）。選択肢は0人（いない）～15人以上の16段階だった。分析では15人以上を15人として扱う。

（恋人人数）最初の結婚までに、～人と恋人として交際した（結婚相手含む）

（デート人数）最初の結婚までに、～人と（二人きりの）デートをした（風俗産業を除く）

（キス人数）最初の結婚までに、～人とキスをした（風俗産業を除く）

（性関係人数）最初の結婚までに、～人と性関係をもった（風俗産業を除く）

仮説1の検証では、0人を0、1人以上を1として、「恋人1人以上ダミー」「デート1人以上ダミー」「キス1人以上ダミー」「性関係1人以上ダミー」として使用する。

仮説2の検証では、人数を量的変数として用いる。小林 (2014) によれば、恋人人数から結婚経験への影響は、上に凸な曲線となった(結婚チャンスのピークは2.7人)。そこで、人数の二乗も用いる。

2.3 従属変数：結婚経験

結婚経験は、婚姻状態のうち現在結婚と離死別をあわせて1、未婚を0とする「結婚経験ダミー」を用いる。

分析では、従属変数が2値なのでロジスティック回帰分析をおこなう。統制変数として年齢を追加し、男女別に分析する。

3 結果

3.1 分布

分布は付録表5となった(図5は恋人人数の分布のグラフで、6人以上をまとめた)。4変数それぞれにおいて、0～2人でピークとなり、おおむね人数が増えるほど該当者が減った。4変数すべてで、カイ二乗検定の結果男女差があった(有意水準0.1%未満)。

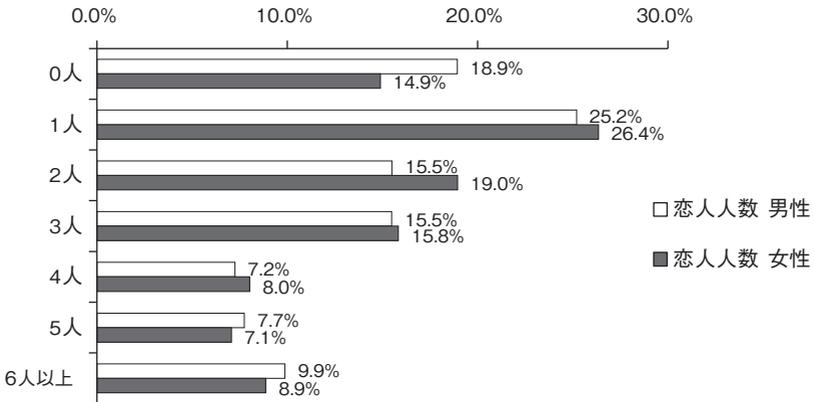


図5 男女別、恋人人数の分布 (男性N=6,004、女性6,003)

3.2 記述統計

記述統計は表2となった。男女ともに、デート人数の平均が最多で、キス、性関係の順で平均がさがった。恋人人数とデート人数では、男女の平均に違いがなかった。恋人人数の平均は男女合計で2.6人で、内閣府(2011)の2.9人、小林(2014)の3.3人とおおむね一致していた。なお、4変数の相関係数は0.72～0.93で、すべて1%水準で有意だった。

表2 男女別、恋愛人数の記述統計(男性N=6,004、女性6,003)

	平均値		中央値		標準偏差		男女差の検定
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
恋人人数	2.6	2.5	2	2	2.8	2.5	
デート人数	3.8	3.9	3	3	4.1	3.8	
キス人数	3.2	3.0	2	2	3.8	3.3	**
性関係人数	2.9	2.4	2	1	3.8	3.1	***

(注) 男女差の検定は分散分析で $p < .10$; *.05; **.01; ***.001。

3.3 比率の比較

結婚経験の比率は、恋愛人数によって異なるのだろうか。そこで、恋愛人数別に、結婚経験者の比率を比較した。

結果は付録表6となった(そのうち恋人人数、キス人数のグラフは図6)。男女とも、どの人数でも、おおむね上に凸となった。つまり、人数が少なすぎても多すぎても、結婚のチャンスが下がるようである。

結婚経験を従属変数とし、1変数だけを独立変数としたロジスティック回帰分析をおこなった(表6)。回帰係数の検定結果より、男性において4つの恋愛人数がどれも正で有意な効果をもったので、人数が増えるほど結婚のチャンスが上昇した。女性においてはデート人数のみ有意だったが、オッズ比が1未満のため、人数が増えるほど結婚チャンスが減少した。

では、0人と1人以上で比較したらどうか。同じ表6のカイ二乗検定結果より、男女とも、どの人数でも、1人以上いると結婚のチャンスが上昇した。

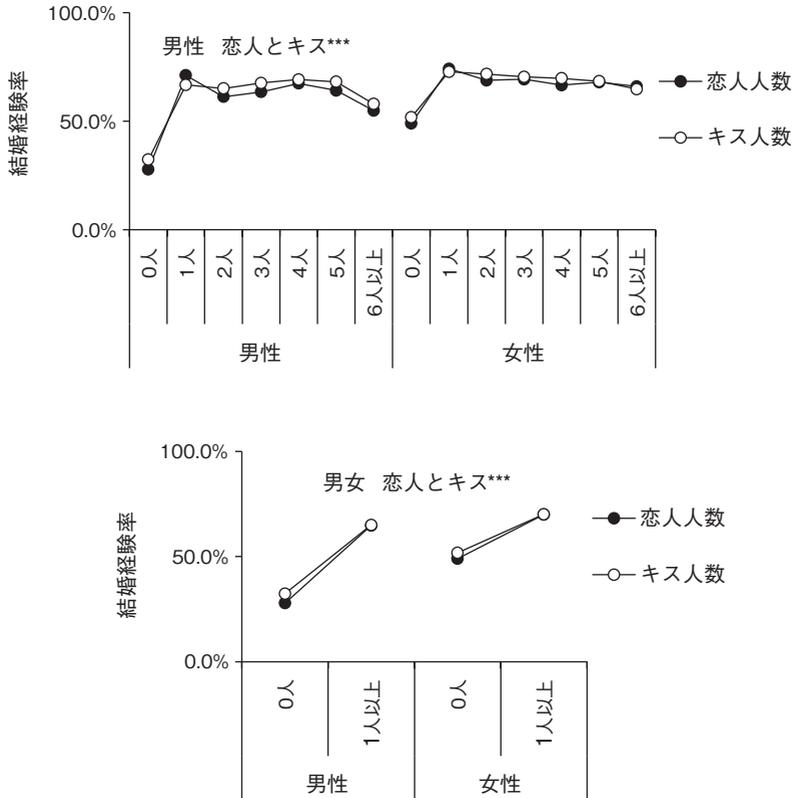


図6 男女別、恋人人数とキス人数別の結婚経験率 (男性N=6,004、女性6,003)

(注) 上は6人以上を、下は1人以上をまとめている。上はロジスティック回帰分析による検定で、下はカイ二乗検定で $p < .10$; *.05; **.01; ***.001。

3.4 ロジスティック回帰分析

それでは、変数どうしで統制した場合、どの人数が効果をもつのだろうか。ロジスティック回帰分析をおこなった。結果は表3となった。

モデル1で、恋愛人数が0人にたいして1人以上であることの効果をしらべた。すると、男女ともに同じ規定要因をもち、恋人経験があるほど、またキス経験があるほど、有意に結婚のチャンスが高まった。オッズ比より、男女とも恋人が1人でもいれば結婚が約3倍しやすくなり、キス経験

が1人とでもあれば約2倍となった。いっぽう、デート経験と性関係経験は効果をもたなかった。

モデル2で、恋愛経験のうち人数の効果を調べた。その結果、男性では、デート人数が上に凸な曲線的な効果をもち、(回帰係数から)ピークは5.8人だった。キス人数も同様の曲線となり、12.9人がピークだった。

女性では、恋人人数が上に凸な曲線的効果をもち、8.2人でピークだった。デート人数は二乗項のみ負で有意だったので、0人から1人、2人と増えるにしたがって、結婚チャンスが単調に減少した。キス人数は、有意な正の効果をもったので、結婚チャンスが単調に増加した。

表3 結婚経験の有無を従属変数とした、男女別ロジスティック回帰分析

	男性		女性	
	モデル1	2	1	2
年齢	0.11 ***	0.11 ***	0.11 ***	0.11 ***
恋人1人以上	1.20 ***		1.12 ***	
デート1人以上	0.03		0.05	
キス1人以上	0.62 **		0.48 *	
性関係1人以上	0.20		0.27 †	
恋人人数		0.00		0.20 ***
恋人人数の二乗		0.00		-0.01 ***
デート人数		0.13 **		0.07
デート人数の二乗		-0.01 ***		-0.01 ***
キス人数		0.36 ***		0.16 *
キス人数の二乗		-0.01 **		-0.01
性関係人数		-0.01		0.00
性関係人数の二乗		0.00		0.00
-2対数尤度	5243.59	5405.38	4870.75	5017.37
Cox-Snell 疑似決定係数	0.355	0.337	0.261	0.242
N	6,004	6,004	6,003	6,003

(注) 値は回帰係数。† $p < .10$; * $.05$; ** $.01$; *** $.001$ 。

3.5 頑健性

以上の結果は、独立変数から恋人人数を除いても、独立変数の4つの恋愛経験を合計し1つの変数としても(二乗項あり)、従属変数を結婚経験から結婚人数へと変えて回帰分析をおこなっても、おおむね同じだった。ただし、従属変数を結婚人数とした場合、性関係人数が男性で単調減少、女性で単調増加の効果をもった。

4 考察

4.1 仮説の検証結果

仮説の検証結果を整理すると、表4となる。2つの仮説はどちらも、おむね支持されたといえるだろう。

ただし、仮説2の分析結果では、いくつかで結婚チャンスのピークが確認された。したがって、恋愛人数は多いほどよいとはかぎらず、むしろ「ほどほど」が適切なようである。これは、小林(2014)で恋人人数の効果にピークがあったことと、一致している。また、デートと性関係は、結婚にあまり貢献しないといえる。

表4 仮説の検証結果

仮説	分析結果	検証結果
1 恋愛人数が0人から1人以上となるほど、結婚のチャンスが増える	男女とも、恋人1人以上とキス1人以上が有意な正の効果 (チャンスがそれぞれ約3倍と2倍上昇)	おおむね支持
2 恋愛人数が多いほど、結婚のチャンスが増える	男性：デート人数とキス人数が上に凸な曲線 (ピーク5.8人、12.9人)。女性：恋人人数が上に凸な曲線 (8.2人)、デート人数は単調減少、キス人数は単調増加	おおむね支持 (いくつかでピークあり)

4.2 リサーチ・クエスチョンへの回答

以上の結果をまとめると、図7となる。仮説1における男性の恋人1人以上の効果は、仮説2ではデート人数に吸収されたのかもしれない。そうであるなら、2つの仮説の検証結果から、結婚のためには、とくに結婚まえの恋人とキスが役立つといえそうである。

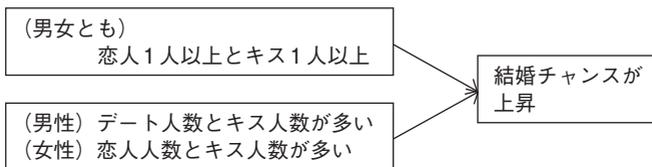


図7 分析結果のまとめ

なぜか。結婚のためには、デートだけでは恋愛経験の蓄積には不十分で、性関係では過剰なのかもしれない。それよりも、「キスだけをするような恋人」こそが適度であって、結婚のための対人魅力やコミュニケーション能力を蓄積できるのだろう。

それでは、恋愛は結婚のための前提条件なのだろうか。もし恋人やキスの経験がなかったら、(オッズ比の逆数から)結婚のチャンスがそれぞれおよそ1/3や半分へとおおきく低下する。この意味で、恋愛経験のうちとくに恋人とキスは、結婚のための前提条件とまではいえないが、重要な「促進要因」となっていることは確実であろう。こうして、リサーチ・クエスチョンにつきのように回答できるだろう。

リサーチ・クエスチョンへの回答：結婚まえの恋愛経験のうちとくに恋人とキスは、結婚のための促進要因となっている。

もちろん、恋人やキス経験がなくても、結婚はできる。表6より、恋人やキスの未経験者でも、男性なら3割前後が、女性なら半分前後が結婚している。とはいえ、それらの経験があれば、男女ともに6~7割へと結婚チャンスがアップする。

たとえていえば、遊園地で「優先入場券」「ファストパス」があれば、アトラクションに優先的に入場できる。このように、恋愛経験は結婚というアトラクションに入るための「優先入場券」といえるかもしれない。なくても入場できるが、あればよりスムーズに移行することができるようである。

4.3 つぎのステップ

この論文では、データのうち結婚経験の比率に着目して、分析した。しかし、人びとの恋愛活動ははるかに多様なはずである。そこで、今後は(デート、キス、性関係といった)イベントの順序や期間のデータを用いて、恋愛の多様性を分析するべきだろう。

また、この論文では男女の比較だけをおこなった。もしコーホート別、教育別、地域別などで比較すれば、より立体的に日本人の恋愛をあぶりだすことができるだろう。

理論的には、小林 (2012) や小林 (2014) は恋愛経験をソーシャル・キャピタル (社会関係資本) の蓄積として概念化し、結婚への効果を測定した。この論文では人的資本の蓄積ととらえた。どちらがより適切かは、理論的な課題だろう。

なお、この論文では恋愛から結婚への移行に焦点を当てた。つぎには、その前の段階において恋愛経験をスタートできる人とそうでない人とのあいだに「恋愛格差」があるのか、あるとすればその規定要因はなにかを検討する必要があるだろう (たとえば小林・谷本 2016 は容姿が恋人人数に影響することを実証した)。

[謝辞]

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (B) 「少子化社会における家族形成格差の調査研究：ソーシャル・キャピタル論アプローチ」(2012～2014年度、研究代表小林盾)、成蹊大学アジア太平洋研究センター共同プロジェクト「ライフコースの国際比較研究：多様性と不平等への社会学的アプローチ」(2014～2016年度、研究代表小林盾)、科学研究費補助金基盤研究 (A) 「少子化社会におけるライフコース変動の実証的解明：混合研究法アプローチ」(2015～2018年度、研究代表小林盾) の成果の一部です。調査にあたり、成蹊大学研究倫理委員会にて倫理審査をうけ承認をえました (2015年2月19日、SREC14-07)。結果の一部が日本社会学会大会にて小林・ブリントン (2014) として報告されました。

執筆にあたり、今田高俊、金井雅之、香川めい、金澤悠介、川端健嗣、小山裕、佐藤嘉倫、谷本奈穂、筒井淳也、開内文乃、Mary Brinton、Carola Hommerich、見田朱子、森いづみ、山田昌弘、渡邊大輔各氏から有益なコメントをいただきました。記して感謝します。

[文献]

- Becker, Gary S., 1964, *Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis, with Special Reference to Education*, National Bureau of Economic Research. 佐野陽子 訳『人的資本：教育を中心とした理論的・経験的分析』東洋経済新報社、1976。
- 開内文乃、2015、「恋愛と結婚：国際結婚に見る未婚化社会のジレンマとは」小林盾・山田昌弘編『ライフスタイルとライフコース：データで読む現代社会』新曜社。
- 北村文・阿部真大、2007、『合コンの社会学』光文社。
- 小林盾、2012、「恋愛の壁、結婚の壁：ソーシャル・キャピタルの役割」『成蹊大学文学部紀要』47：157-164。

- 小林盾、2014、「結婚とソーシャル・キャピタル：何人と恋愛すれば結婚できるのか」辻竜平・佐藤嘉倫編『ソーシャル・キャピタルと格差社会』東京大学出版会。
- 小林盾、メアリー・プリントン、2014、「ほんとうに若年男性は草食化したのか：量的データによる検証」日本社会学会大会。
- 小林盾、カローラ・ホメリヒ、見田朱子、2015、「なぜ幸福と満足は一致しないのか：社会意識への合理的選択アプローチ」『成蹊大学文学部紀要』50: 87-99。
- 小林盾・谷本奈穂、2016、「容姿と社会的不平等：キャリア形成、家族形成、心理にどう影響するのか」『成蹊大学文学部紀要』51（印刷中）。
- 内閣府、2011、『結婚・家族形成に関する調査報告書』。
- NHK「日本人の性」プロジェクト編、2002、『データブック NHK日本人の性行動・性意識』日本放送出版協会。
- 日本性教育協会編、2013、『「若者の性」白書：第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館。
- 松井豊、1993、『恋ごろの科学』セレクション社会心理学12、サイエンス社。
- 森川友義、2007、『なぜ、その人に惹かれてしまうのか?: ヒトとしての恋愛学入門』ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- ノッター、デビッド、2007、『純潔の近代：近代家族と親密性の比較社会学』慶應義塾大学出版会。
- 佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編、2010、『結婚の壁：非婚・晩婚の構造』勁草書房。
- 谷口淳一、2013、「恋愛しない・できない若者たち」日本応用心理学会企画、大坊郁夫・谷口泰富編『クローズアップ恋愛』現代社会と応用心理学2、福村出版。
- 谷本奈穂、2008a、『恋愛の社会学：「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社。
- 牛窪恵、2015、『恋愛しない若者たち：コンビニ化する性とコスパ化する結婚』ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- 山田昌弘・白河桃子、2008、『「婚活」時代』ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- 山口司、2013、「恋愛のプロセス」日本応用心理学会企画、大坊郁夫・谷口泰富編『クローズアップ恋愛』現代社会と応用心理学2、福村出版。

[付録]

表5 男女別、初婚までの恋愛人数の分布（男性N=6,004、女性6,003）

	恋人人数		デート人数		キス人数		性関係人数	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
0人	18.9%	14.9%	17.8%	13.1%	22.2%	17.7%	26.9%	26.9%
1人	25.2%	26.4%	15.6%	15.8%	20.4%	21.7%	22.2%	25.2%
2人	15.5%	19.0%	15.3%	17.4%	15.6%	18.3%	14.9%	15.7%
3人	15.5%	15.8%	14.3%	16.1%	12.3%	14.0%	10.9%	10.4%
4人	7.2%	8.0%	7.5%	7.9%	6.5%	6.9%	5.5%	5.5%
5人	7.7%	7.1%	8.9%	8.4%	6.8%	6.8%	5.4%	5.4%
6人	2.8%	2.6%	3.8%	3.9%	2.9%	3.3%	2.5%	2.2%

7人	1.5%	2.0%	2.2%	3.1%	2.0%	2.3%	1.5%	1.6%
8人	1.1%	1.1%	1.8%	2.3%	1.5%	1.5%	1.1%	1.3%
9人	0.6%	0.4%	0.8%	1.0%	0.7%	0.8%	0.7%	0.6%
10人	1.5%	1.3%	3.9%	4.1%	2.6%	2.4%	2.4%	2.0%
11人	0.2%	0.2%	0.3%	0.4%	0.2%	0.4%	0.2%	0.4%
12人	0.2%	0.2%	0.3%	0.5%	0.2%	0.4%	0.3%	0.4%
13人	0.1%	0.1%	0.2%	0.1%	0.1%	0.2%	0.1%	0.1%
14人	0.1%	0.0%	0.1%	0.1%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%
15人以上	1.8%	0.9%	7.3%	5.6%	5.9%	3.2%	5.4%	2.3%
男女差	***		***		***		***	

(注) 男女差の検定はカイ二乗検定で† $p < .10$; *.05; **.01; ***.001。

表6 男女別、初婚までの恋愛人数別、結婚経験者の比率 (男性N=6,004、女性6,003)

		恋人人数	デート人数	キス人数	性関係人数
男性	0人	27.8%	28.2%	32.3%	39.1%
	1人	71.1%	63.3%	66.7%	67.3%
	2人	61.2%	63.2%	65.1%	64.8%
	3人	63.4%	70.2%	67.6%	67.7%
	4人	67.4%	67.7%	69.2%	68.2%
	5人	64.1%	70.7%	68.1%	64.6%
	6人以上	54.8%	57.1%	57.9%	56.4%
	ロジスティック回帰による 回帰係数の検定	1.08***	1.05***	1.05***	1.04***
	カイ二乗検定	***	***	***	***
	0人	27.8%	28.2%	32.3%	39.1%
1人以上	64.7%	64.1%	65.0%	64.6%	
カイ二乗検定	***	***	***	***	
女性	0人	49.0%	49.6%	51.8%	58.9%
	1人	74.1%	71.1%	72.7%	73.9%
	2人	68.8%	72.6%	71.7%	69.5%
	3人	69.3%	71.2%	70.4%	70.3%
	4人	66.6%	71.3%	69.7%	65.0%
	5人	67.9%	68.7%	68.4%	64.8%
	6人以上	66.0%	63.9%	64.8%	64.8%
	ロジスティック回帰による 回帰係数の検定	1.01	0.98**	1.01	1.00
	カイ二乗検定	***	***	***	***
	0人	49.0%	49.6%	51.8%	58.9%
1人以上	70.0%	69.4%	70.1%	69.7%	
カイ二乗検定	***	***	***	***	

(注) ロジスティック回帰による回帰係数の検定の値はオッズ比。† $p < .10$; *.05; **.01; ***.001。